

尾関周二著

『21世紀の変革思想へ向け』

—環境・農・デジタルの視点から—

評者：高田 純



著者は長年エコロジ的な社会をめざして、工業社会の限界を批判し、農業を再評価してきた。評者も大工業的な生産様式と生活様式を批判する点で、著者に近い問題意識を抱いており、この点からいくつかの論点について、章をまたいで、著者の見解にコメントしたい。

(1) 著者はマルクスにおける物質代謝の思想の展開を踏まえながら(第2章の2)、人類史を物質代謝の見地から捉え直し、農業革命、産業(工業)革命に続く第三の革命としてエコロジ革命を構想するが(第3章の1)、物質代謝を担う社会的主体の歴史的变化にも目を向け(第3章の2)、第三の革命を「エコロジ的革命」コミューンの革命」とも呼ぶ。そのさいに、産業革命に対応する社会的主体として国民国家が強調され、エコロジ的革命の担い手は、グローバルに連帯する国家、国民であるといわれる。なお、農業以前のおよび農業の段階での社会として共同体が重視され、この点へのマルクスの注目が援用される(第4章の1)。共同体はその後の段階においても基層として存在し

ており、エコロジ的な社会において新しい共同体として再編される方向がめざされる。著者はさらに小規模な農業経営へのマルクスの着目にも言及しているが(第5章の1)、これは共同体的所有の後者の形態を指すと思われる。なお、著者は言及していないが、エコロジ的な視点から見て、とくに農業において小規模経営が重要なのは、農業が土地や気象などの自然条件によって制約され、それへの柔軟で個別的な対応が必要とされることにあるであろうが、このことは大工業の農業経営においては困難である。

(2) 本書の特徴の一つはデジタル革命の重視にある。情報革命社会が、工業社会に次ぐ第四段階であるという主張は一九九〇年代以降に出され、近年は、デジタル社会が第五段階をなす(日本政府・財界における「Soft 5.0」とも宣伝されている)。ここで問題となるのは、著者がデジタル社会を、工業社会を超える段階と位置づけているのかどうかである。デジタル社会についてはつぎのような問題が検討されなければならないと思われる。①デジタル的思考に認識論上、方法論上の限界がないかどうか、②デジタル的思考に整合的でありうるかどうか、③デジタル生活様式が人びとの自由な共同生活にとってつねに肯定的かどうか。

著者も現行のデジタル社会構想を批判しており、工業界の調和に基づく将来社会においてはデジタル技術の「民主的」な利用が必要であるとも述べている(第7章の1)。著者は、「デジタル技術によってアシストされた」自然共生的な産業(農工デジタル社会)を構想するが、そのさいにデジタル技術の長所とともにその限界についての具体的な分析が必要と思われる。デジタル社会について評者のとりあえずの見解はつぎのようなものである。情報社会とデジタル社会は、工業社会を質的に超える新しい段階ではなく、工業社会の発展型であり、要素論的、機械論的性格を基本的に脱却していないが、そこでは因果論、線型的思考法の限界も示され、これを超える方向も模索されている。

(3) 評者にとって興味深いその他の論点に簡単にコメントしたい。環境思想において一部の自然中心主義者は自然の内在的価値を自然保護の根拠として強調するが、評者は中心主義を批判しつつ、自然の内在的価値をも批判してきた。著者はこれについてつぎのように述べている(第1章の3)。生物は環境にたいする自分の保存のために環境に働きかけ、そのなかに環境の評価の要素を含み、「潜在的な評価主体」として固有の価値をもつが、これは顕在的な評価主体としての人間とは同格ではない。評者も、生物が外界に価値的に関係し(ただし価値意識を伴わず)、この点で無生物とは異なることを認めたい。ただし、自然中心主義においては、内在的価値をもつものは生物個体か、生

物種か、生態系全体(無生物を含む)かをめぐって論争がある。無生物を含む自然全体を保護する根拠をどこに求めるかはやはり問題として残っている。

(4) 著者は近代における物質代謝の社会的主体との関連で Nation State に言及し、それは民族国家ではなく、国民国家を意味すると見なすが(第4章の2)、これについては議論の余地がある。私見では、Nation はもとも民族を意味したが、近代国家の成立のさいにこれが利用された(国民のイデオロギイ的性格)。国民がしばしばマジヨリティー民族と同一視されるのはこのためであろう。

(5) 著者は技術について、これを広く人間主体と環境との関係で捉える点で三木清の見解を再評価する(第6章の2)。この点については日本では戦前から体系説(労働手段の体系としての技術)と適用説(法則性の意識的適用としての技術)とのあいだで論争が展開されたが、かみ合ったものとはならなかった。今日エコロジ的観点から技術の基本性格について検討すべき課題が多く残っていることを痛感する。

(6) 近年自然科学において複雑系科学という新しい見方が登場しており、著者はエコロジカルな思考との関係でこれに注目している(第6章の3)。この新しい科学は自然観、方法論の転換にも関係し、弁証法的考察の具体化という側面をもつと思われ、哲学の立場からも考察が必要であろう。著者の問題意識との関係で問題となるのは、複雑系科学がデジタル思考とのような関係をもつか、前者は後者と一体なものか、後者を超えるものかである。